

令和 4 年度 さいたま市立与野南中学校 学校だより

み な み か ぜ



南 風

第 9 号

令和 4 年 11 月 1 日発行

<http://yonominami-j.saitama-city.ed.jp>

＜学校教育目標＞ 進んで学ぶ生徒 心豊かな生徒 心身共に健康な生徒

目指すところ

校長 吉 原 誠 士

現在、教室には使用に慣れたタブレットが揃い、黒板投影用のプロジェクターも加わりました。調べ学習での活用は当然として、設置された機器の他の利用例には、数学なら辺の上で一点を移動させた時やグラフの値を変えた場合に起こる変化を考える際の助けにする、英語では課題や例文を連続的に示していったりフラッシュ式に単語を提示したりして息もつかせぬ展開を図る、体育は自分の試技を撮影して上手な人の理想的な動きと比較しながら技量を上げる、などがあります。端末上で他の人の意見を確認、共有化したり、回答に対して教員から個々にアドバイスを受けてたりすることもできます。

これまでになかった学習スタイルが可能になり、“コロナ禍”や“はたらき方改革”、“学校教員の人手不足”などへの対応もパソコンによりフォローされようとしています。しかし私はそのような変化の中にあっても「残すべき学習（学校ではありません）の文化（ふるまい方）」があると考えます。具体的には自分の手を動かして文字を並べ文や文章を書く、筆算をする、絵筆を運ぶ、毛筆に親しむ、楽器を鳴らすなど。さらに、図書館でネットには載っていないたくさんの情報を集める、残りページの厚さを指で確認しながら読書する、辞書や事典で目的とするページを一発で開けるようになる、なども含みます。情操を豊かにし、脳の健全な発育のためにもこれらの活動は残さなければならないと思うのです。

2学年の授業でブタの内臓の観察がありました。食肉検査場で手配した心臓、肝臓、小腸などを使っていたのですが、すべてが食用ですから寄生虫のチェックも済ませてあります。「ヒトのからだ」の学習にあたって、臓器の大きさはブタとヒトでほぼ同じなこともあって、よく用いられてきました。入手に多少の手間がかかっても、観たり触れたりを自由にできる教材です。かつては“もつ鍋”などにして味覚も楽しもうという猛者がいました。そのことへの賛否はともかくとして、可能な限り実物に迫ろう、本物の魅力を伝えようという教員の努力は、どの科目であれ今後とも必要だと確信しています。

よりよい経験を生徒に積ませるために、教員も同様のプロセスを踏んでおかなければなりません。ふと、自分が小学校5年生の時に受けた解剖の授業を思い出しました。担任が麻酔薬をしみ込ませたハンカチでフナ（フナ）の鼻を押さえました。ハサミを入れようとしても暴れる解剖材料に再びハンカチをあてがいが「おかしいなあ、麻酔がかからない」とつぶやく先生の声が聞こえました。普段は怖いのに目の前で戸惑う大人を前にして、「先生、魚類はエラ呼吸ですよ！」なんて言える訳もありませんでした。この先生を貶める意図は全くありませんが・・・教える側もまだまだ気を抜けません。本校は直接体験（学習の文化）を大事にすることと、情報機器を活用することの両立を目指します。

今年は明治5年創業の鉄道の150周年。さいたま市の「鉄道博物館」だけでなく、「京都鉄道博物館」や「リニア新幹線館」を発作的に訪れたいとなりました。少年時代にメカに気を引かれた気分が今も抜けないのでしょう。150年の節目は学校という制度も同様です。それに比べて南中は61周年。150年を目指すと同校記念日（10月28日）をあと89回迎えることになります。見てみたいな、記念式典！